

## 略本・流布本『方丈記』をめぐって

——一条兼良のこと、及び享受史のことなど——

今 村 みゑ子

### はじめに

『方丈記』の諸本は数多く伝えられているが、本文と内容の相違により、広本系統、略本系統に大別され、さらに広本系統は古本系統と流布本系統に二別されている。そうした諸本の存在は、鴨長明真作の『方丈記』がいかなるものであるのかという問題に関わる。広本古本系統の最古本大福光寺本の発見によって、広本古本系統が長明の手に成ったことはほぼ間違いないこととなった。しかし、略本系統及び流布本系統については、略本は後人の偽作であるのか、真作であるのか、また流布本は後人の増補したものなのか、長明の真作なのか、今日まだ定説を見ないでいる。

こうした諸本の問題は決定的証拠資料がないかぎり、その判断は推論の域を出ないものであり、触れることは難しい。しかし長明という作者、また『方丈記』という作品に関わる等閑視できない問題である。本稿は諸本の伝来と成立についてささやかながら気にかかることを提示し、また中世において享受されていた『方丈記』の姿を享受史からながめて、長明真作『方丈記』を探ろうと試みるものである。

## 一 諸本の真作・偽作・増補をめぐる研究の現在

まず、広本と略本の相違を整理しよう。広本と比較して相違する略本の主な点は、①文章の長さが広本の三分の一弱であること、②五大災厄の記事と末尾の文章を有しないこと、③長明の個人的な人生の経緯とその述懐に全く触れないこと、④広本の内容（表現）・構成において顕著な『池亭記』の踏襲意識が全くないこと、にも関わらず、表現にはその痕跡が見られるのは、おそらく『池亭記』を意識することなく、広本の本文から任意に入ってきたと思われること、⑤草庵生活の具体性や積極的な数寄精神がないこと、それに伴って和歌（西行の和歌を含め）を下敷きにした文章がないこと、⑥そうした内容の相違と関連して構成や文体が異なること、などが挙げられる。以上の広本との相違によって、略本の内容は、長明の個人的風貌や生き生きとした生活の様子が浮かび上がらず、浄土信仰を骨子とした思念のみを綴った書となっている。またそれ故、類型的表現による概念の羅列が多い。略本と広本との共通点は方丈の草庵における仏教思念を綴ることに絞られる。

次に、広本の流布本系が古本系と大きく相違する点を挙げよう。①五大災厄の大地震の記述の中に、武者の子が築地の下敷きになり、両目がとびだして死んだ話がある。②草庵のしつらいに関する描写に、若干の内容の相違と順序の相違が見られる。また、草庵の下に薬草園を作ったとある。③閑居の気味を述べる段に、「大方、世をのがれ身をすてしより、……生涯ののぞみは、おりおりの美景にのこれり」の文がある。

最後に略本間の異同について。略本同士の間では表現も内容も近い。ただし長享本には閻魔法王呵責の記述がある。延徳本には広本に見られた、草庵の折り琴・継ぎ琵琶の記述がある。真字本は孤本で『方丈記』諸本の中でもっとも簡略であり、唯一漢文の本文である。

さて、広本・略本の関係については、広本真作・略本偽作説と、広・略ともに真作で略本を草稿本とする説が対立

している。前者には山田孝雄氏<sup>(1)</sup>、築瀬一雄氏<sup>(2)</sup>、後藤丹治氏<sup>(3)</sup>、西尾実氏<sup>(4)</sup>などの説があり、一時定説視されるむきもあった。しかし、後者の説も根強く、川瀬一馬氏<sup>(5)</sup>、伊藤博之氏<sup>(6)</sup>、細谷直樹氏<sup>(7)</sup>、鈴木久氏<sup>(8)</sup>、貴志正造氏<sup>(9)</sup>などの説がある。略本偽作説は根拠に、文章・思想の同一人とは思えない隔絶した相違、『池亭記』の影響の有無、広本には長明の他作品である『発心集』『無名抄』との関連が見えること、略本の書写年代の新しさ、などを挙げる。しかしそれは、略本草稿説を説得するに至らず、両者は並行線を辿っている。最近再び、略本は後世の偽作とする説が、佐竹昭広氏<sup>(10)</sup>や加賀元子氏<sup>(11)</sup>によって提唱されている。

また広本の中の古本・流布本の関係についてはあまり触れられていないが、築瀬一雄氏は流布本系は後世、古本系を増補・修正したものとみた<sup>(12)</sup>。一方、吉田幸一氏は、流布本のうち最古の兼良本の祖本と古本系の大福光寺本とは、原作者において前者初稿本、後者修正本として成立したのではないかと推察<sup>(13)</sup>、この説は略本も真作であるとすると、川瀬一馬氏、貴志正造氏によって支持された。両氏は略本・流布本もすべて長明自身によって成立したと見る。

## 二 略本・流布本の伝本に関する疑問

さて略本の延徳本について気になることがある。延徳本は奥書に、

此本奥書曰 方丈記者是祇翁之所持以長明自筆卷物写之畢誠筐中之重宝也

延徳二年三月上旬

肖柏判

とある。延徳二年（一四九〇）、連歌師肖柏が、師の宗祇の所持していた長明自筆の卷物によって書写したというのである。この年宗祇は七十歳で健在である。なお肖柏の『夢庵記』には「草庵のさま、四隣に長松花樹めぐりて、前庭に大なる巖あり」とあり、『方丈記』の享受が窺える。

この奥書は、従来、略本系統の一本は連歌師の間で伝承された、と認識されるのみであった。しかし、極めて不可

解なことが生じてくるのである。宗祇が所持している『方丈記』が、長明自筆であるか否かはさておいて、略本であるということである。というのも、宗祇が親密に交流した人々の中に、広本『方丈記』を知る者が二人も明らかに存在するのである。一人は一条兼良である。兼良は『方丈記』を書写しており、今日兼良の自筆といわれるものが、広本・流布本系の最古本、兼良本として現存する。もう一人は宗祇が尊敬する連歌師心敬である。心敬は『ひとりごと』に『方丈記』を読んだことを明記し、安元の大火の記事に触れているので、その『方丈記』は広本であることが知られる。彼らと親密な文学的交流のあった宗祇が、略本——しかも長明自筆と伝えていた——を所持していたという。一度でも彼らの間で『方丈記』が話題に上ることがあったなら、互いにその内容の相違に気付くはずであろうが、そういうことがなかったのであろうか。宗祇だけではない、書写した肖柏もまた兼良との直接交流があった。兼良なきあと書写したにしても、この同じ時代に同じ交流圏・文化圏にあって広・略二本が存在したのはなぜだろうか。宗祇の所持する略本『方丈記』は誰から伝えられたものであろうか、また宗祇はそれを本当に長明の自筆だと信じていたのであろうか。書写年の延徳二年はその兼良（文明十三年八一四八一〇没）も心敬（文明七年八一四七五〇没）もすでに亡く、かれらが没した後これが突如現れるということも少々気になる。

一方もう一つの略本・長享本の書写も同時代になされている。こちらの奥書は次のとおりである。

写本云 長享二年戊申十二月十三日於宇多福西本願寺拽老眼雖為寒中禿筆毛龜鳥跡氷堅依為大功写之者也

仏子英源

長享二年（一四八八）宇多福西本願寺で英源なる僧が書写したものである。延徳本書写のわずか二年前である。この寺は後藤丹治氏の調査により、『大乘院寺社雜事記』文明元年七月九日条に、興福寺末寺として見える「宇多福西灌頂寺」の子院であることが明らかになっている。<sup>(15)</sup> 延徳本との関係は、延徳本にある（広本にもある）「をり琴・つぎ琵琶」に関する記事がなく、延徳本にない閻魔呵責の記事があることが相違するが、それ以外は本文もほぼ一致する。

従来略本のこの二本は、その書写・伝承の人脈から一つは連歌師の間に、一つは興福寺系統の寺に伝承したとされてきた。しかし両者は実は案外近い文化圏にある。つまり、連歌師と興福寺とを結ぶと、そこには一条兼良、ないしはその子息の興福寺大乘院門跡尋尊（『大乘院寺社雜寺記』の作者）の存在が浮かび上がるのである。さらに言えば、当時宇多は兼良に好意を示し、かつ宗祇とも交流のあった伊勢国司北畠教具の勢力圏であり、兼良は文明二年九月伊勢に下向した折、教具に歓待されている（『大乘院寺社雜寺記』）。彼はまた興福寺の東門院を管領し子弟を歴代院主にしている。

しかもここにもう一つ流布本系統の最古本、兼良本『方丈記』の存在もからんでくる。吉田幸一氏は「兼良本の祖本（即ち流布本の原本）と大福光寺本（古本系の原本）とは、長い年代を互ひに異本關係を保つて伝来して来つた<sup>(17)</sup>」との見方をしているが、流布本に兼良本より古い伝本が現在見つからない事実を再考する余地はないだろうか。つまり略本二本のみならず、流布本系の最古本兼良本も同じ頃出現した、という偶然を合わせて考えるべき余地はないだろうか。

そこで少し兼良について眺めてみよう。兼良は摂政、太政大臣、三度の関白就任と、足利末期の乱世を最高位の公卿として生きた。二条良基の孫でもある。大学者で「本朝五百年以来」の才人（『長與宿禰記』）、「日本無双」の才人（『十輪院内府記』）と讃えられた。九条道家から伝えられた膨大な蔵書を相伝し、その著作の多さは枚挙にいとまなく、有職故実、政道、仏教、文学、蹴鞠、音楽など多岐に渡る。自身歌人であり連歌作者でもあったことから、文学に関する造詣は深く、『源氏物語』『伊勢物語』『日本書紀』『古今集』など古典に関するもの、連歌に関するもの、『東斎随筆』のごとき説話を取り入れたもの、『藤河の記』のような創作など多い。書写も多くものし、また古典の講義なども行っている。

さて、興福寺との關係は、直接には応仁二年（一四六八）八月、乱を避け尋尊を頼って興福寺（成就院）に移り、

文明九年（一四七七）までの十年間、六十七歳から七十七歳までを過ごしたことである。文明二年関白職を辞し、文明五年出家、老齡ということもあり隠遁生活を送る。ただしこの間も執筆活動はますます旺盛で、また連歌会の頻繁な催し、和歌の詠作も続けている。尋尊とともに「大乘院文壇」というべき場を形成していた。<sup>(18)</sup>

なお尋尊もまた膨大な著作を残し、編著、書写を行っている。『大乘院寺社雜事記』によると、兼良から『伊勢物語愚見抄』を譲り受けたり（寛正三・二・一〇）、『河海抄』を書写したり（文明四・七・一一）、『源氏物語』を読んだり（文明一〇・七・二八）など、古典にも親しんでいる。また注目されるのは、度々園池、築地、附属建物などの修造を行っており、造園配置に関心が高いことである。

宗祇はすでに兼良とは交流をもっていたが、兼良の興福寺滞在の間も、『大乘院寺社雜事記』によると、度々兼良や尋尊を訪れ、兼良に拝謁し、また兼良の連歌会に参加し（文明元・七・一三、同五・一〇・八この折には金子五百疋を兼良に進上している）、同七・九・三〇、同九・八・二、あるいは『竹林抄』の序文を兼良に依頼したり（文明八・五・二）、また宮中で行われた『七夕歌合』を持参してその判詞を請う使者を勤め（文明九・七・七）、兼良に請い『代始和抄』を書いてもらっている（文明一〇）。肖柏もまた兼良から『源氏物語』について難語や故実を質問し、その説を文明十二年『肖柏問答抄』としてまとめている。こうした晩年の兼良と興福寺の密接な関係と、宗祇・肖柏らとの交流、そこに略本『方丈記』や兼良本『方丈記』はどのように存在していたのだろうか。なお吉田幸一氏は兼良本について、「もし彼の方丈記筆写が、応仁以前であったとしたら、彼の多くの蔵書とともに滅びてしまったのではなからうか。応仁の乱後の隠者の生活や彼晩年の心境と、彼の子孫たる兼冬に伝来せしめたことを考へ合せると、方丈記の書写年代は彼七十七才代に於ける晩年、即ち文明年間の前期比ではなからうかと思はれる。筆蹟に枯淡味を帯びてゐることも之を証するものゝやうである。」<sup>(19)</sup>と推察するが、するとますますもって、この兼良本の存在も気になるのである。

はなはだ短絡的な臆測になるが、略本二本、さらに兼良本、それらはともに同じ頃、一つの文化圏（兼良・尋尊あるいは興福寺）で突然出現したと言えないであろうか。臆測に臆測を重ねるなら、一条兼良が何らかそこに介在しているのではないだろうか。臆測であることを覚悟で思い切った推論を述べてみよう。広本はもとと古本系のみが伝来していたのであり、それが兼良の書写の時点で改変されて兼良本なる本文が成立した。略本もまた兼良の意図によつてその身边で成立した。

この臆測には少し理由を加えなくてはならない。まず兼良本について。いわゆる流布本系の本文で、古本系にない記述が加わっている。それを後人の増補とみるのか、長明自身の草稿とみるのか、見方の別れているところである。そこで、流布本のみにある次の記述に注目しよう。

草庵の描写に薬草園の記述がある。

庵の下にすこし地をしめ、あばらなるひめがきをかこひて園とす。則、もろもろの薬草をうへたり。

薬草を植えるという発想は、『方丈記』が先蹤とした『池亭記』や、そうした漢文の類にも見当たらない。「野辺のおはぎ、峰の木の実、わずかに命をつなぐばかりなり」と書いた『方丈記』であるのに、薬草を服して健康を保とうと言うのは不審である。それにつけて『大乘院寺社雑事記』には「於当山香氣薬草限之事不可然」（文明四・十・廿二）、「服薬草」（明応四・二・廿三）といった記事があるのが注目される。中でも文明七年三月十日条には「成就院ニ参申、予自今日薬草服之」とあり、尋尊が兼良に今日から薬草を服することを告げている。尋尊あたり（兼良も？）には薬草に対する知識・関心があったと窺われるのである。

次に、閑居生活礼讃のクライマックス近く、「惣テ、カヤウノ楽シミ、富メル人ニ対シテ言フニハアラス、只、ワガ身ヒトツニトリテ、昔今トヲナゾラフルバカリナリ」と「夫、三界ハ只心ヒトツナリ」との間に、流布本には次のごとき文章がある。

おほかた、世をのがれ、身を捨てしより、恨みもなく、恐れもなし。命は天運にまかせて、惜しまず、いとはず。身は浮雲にならずらへて、頼まず、全しとせず。一期の楽しみは、うたたねの枕の上にきはまり、生涯の望みは、折り折りの美景に残れり。

巧みな文章と言えよう。しかしこの駘蕩たる自適な気分は、前後の高揚と緊迫に比し、ややニュアンスを異にする。「うたたねの枕」が文飾だとしても、「蕨のほろを敷きて、夜の床とす」とある方丈の生活とは違和感がある。乱を避けて晩年奈良に隠居・出家した兼良にしてふさわしいと思うがどうであろうか。

なお大地震の記述の中に、武者の子の両目が飛び出した話があり、前後の語り口から違和感を感じさせると、従来指摘がなされている。また草庵内部のしつらいの微妙な相違は何を意味するのか、長明自身の模様換えといった推論もある。ならば、ここに尋尊の熱心な造園、建築物修造への趣向などを想起してみたい気がする。

しかし兼良本には不可解な脱落がある。古本には無論、嵯峨本以下版本にもある記述がいくつか脱落しているのである。脱落は「或ハ石間ニ詣デ」、「田上」（「川」と続く）、「朋友ノ為ニツクル。或ハ主君・師匠及ビ」（「財宝車馬」と続く）、「（やつことするには）」の後ろ）「シカズ、イカガヌビトスルトナラバ」、「使フトモタビタビ過ズサズ」などに当たる部分である。とすると、兼良本は現在流布本の最古本であるが、そのまま嵯峨本のような流布本の祖本になったわけではなく、両者の祖本は別に存在したということになる。ところで、兼良は自身の作品を書写するということを行っており（『筆のすさび』九条家本奥書）、あるいは人に書写させてもいる。人に与えるためには何本も必要になるので、兼良本の脱落は単なる脱落にすぎないもので、書写の時点で脱落したと考えられるものである。

次に、略本について。略本は前節にも述べたように、浄土信仰に関する類型的表現が見られる本文であり、説教、喧伝の傾向が指摘されている。<sup>(20)</sup> その最後の言葉は「六道四生の群生を導かむこと、いくばくの楽しみぞや。」と、強い利他意識を露にしている。こうした動機が兼良の信仰と関わるとしたらどうであろうか。



兼良には末世に遭遇した意識から易行道の浄土信仰・念仏信仰がある。寛正三年浄土宗の清浄華院等熙の国師号を奏上したり、また著作をものしている。寛正四年、六十二歳（応仁の乱の四年前）の折に著した『勸修念仏記』は、「今はまだ末法万年の内也。念仏の宗のもっぱらさかりなるべき時節なり。又賢護経に、正法滅盡の時、像法滅盡の後、諸の悪僧盛の時、比丘悪行の時、諸国あひあらそひうたん時、此念仏三昧は、閻浮堤に流布すべしと見えたり」と言い、その時代認識のもとに、「四衆の信心をすすめて、九品の得生をねがはしむるもの也」との動機を記して、浄土の法門を広く渉獵して念仏の必要を説く。実際、興福寺においても、兼良滞在中に「極楽坊大念仏自昨日始之如例」（『大乘院寺社雜事記』文明四・三・十九）など、念仏が行われている。こうした兼良もしくは興福寺の念仏信仰と合わせ考えて、略本の浄土信仰の勧めを兼良その人に成ると考えることもあながち荒唐無稽ではないだろう。

さらに言えば、『勸修念仏記』には「西方の法門をば、平生耳にうたせながら、臨終の時の十念を心あてがいにして、かねては行業をつむ事をせず、思ふままにふるまふは、中々念仏が我身のあだと成て、惡逆にただよふべきあてがいなり。下品下生の衆生よりもなほ当機にかなはぬ人にて侍るべし。」とも述べているので、このような兼良の意識からは、自戒と懺悔、臨終念仏への期待で終わる広本『方丈記』の長明の信仰は不足に見え、民衆の信心を教え導くために、略本のような内容が必要であつたとも臆測できよう。

また略本の表現には、兼良の著作にも見える表現をいくつか指摘することができる。略本の「浅茅が原の露」「かうばしき友」などは、兼良の『竹林抄』序文の「あさちが原の露」「かうばしき跡」といった表現と重なる。また「若き子をさきだてて袖をしぼる老人もあり」「或は契を結ぶ夫妻にわかれて、比翼の語らひ空しくなり」「鸚鵡の囀と聞き」立よりうらめしきはなし」「あるひはさよの枕のささめごと、連理の枝、比翼の鳥と契りしかども、むなしきからのみとどまりて」「鸚鵡舍利等のもろもろの鳥法音をさへづり」「浄土にある鸚鵡舍利等もろもろの鳥は」（以上、上巻）、

「一生を夢のわたりに送りて」(序文)等と重なる。

そもそも作品の改変ということは、誰にでもなしうるものでもないだろう。それなりの文章力や知識や目的があるはずである。兼良には、自在に作品を創作する能力がある。先に挙げた膨大な著作には、要文集あり、抄出あり、改変あり、思索あり、創作ありで、その目的に応じて、原典の操作は自在である。『東斎隨筆』の、例えば長明出家説話は、『十訓抄』からの書承であるが、半分ほどに縮め、かつ『十訓抄』にない情報を加えている。また兼良は自分の著作に絶えず修訂を加え、『伊勢物語具見抄』のように初稿本や再稿本を作り、書写し、人にも書写させている。

そこでこのように推論する、兼良は一度はほぼ忠実に——若干の改変を施して——広本『方丈記』を書写した(流布本の成立、さらにそれを書写したものが現在の兼良本)。そしてさらに『方丈記』に執筆意欲をそそられ、己の信仰をこめて自他に資するため、その『方丈記』を大幅に改変し(略本の成立)、興福寺の僧や宗祇等に流した。宗祇には「長明自筆」とは言わなかったかも知れないが、宗祇は兼良の没後、それを「長明自筆」と称した。臆測に臆測を重ねた私論である。しかし、もともと略本はどこかで、長明でなければ誰かある特定の人物が作ったのである。そしてその人物は無論広本を熟知していたし、それを傍らに置いて略本を作ったのである。そういう人物がいたことは確かなのである。それが可能な人物として、一条兼良を想定してみたのである。

以上、愚行とも言うべき強引な臆測を述べたのは、従来、略本が後人偽作だとして、流布本が後世の増補だとして、それでは何時、誰が、何のためにそれをなしたのか、ということについて、何ら見通しがなかったからでもある。この臆測を主張するつもりはない。現存の諸本のみを手掛かりに、短絡的にこうした作品の成立や伝来ということを軽々に言つてよいと思わない。しかし、臆測ではあつても臆測が生じるこの兼良周辺の状況に、一度目を向けてみることがあつても良いと思つた次第である。

### 三 享受史から見た『方丈記』

前節に述べた臆測には背景がある。『方丈記』に直接言及した作品、あるいは『方丈記』の本文と関わりがあると思われる作品を検討すると、広本である可能性はあっても、略本が享受された形跡はなく、また広本も本文からすると流布本系統のものではなく古本系統のものであったらしい、ということである。つまり、中世の長きに渡って、もし略本や流布本が享受されていなかったとしたら、いったいどのような形で長明作の略本や流布本は伝来したのであるうか。いやもともと存在しなかったのではないだろうか。以下、『方丈記』との関わりがあると思われる作品をその成立期の順に検討する。

#### (1) 『閑居友』

長明の生存時代に最も近い作品である。作者は九条家出身、良経兄とされる慶政。作品の成立は起筆を長明没年に当たる建保四年（一二二六）頃と推察され、完成は承久四年（一二二二）である。長明の『発心集』を強く意識した言及があり、慶政は『発心集』のごく初期の享受者である。しかし『方丈記』の享受となると確かな証拠がない。三木紀人氏は『閑居友』の作者慶政は長明の『方丈記』には触れる所がない。ぜんぜん知らなかったのか、特別精神的刺激を受けなかったのか、それとも『方丈記』に対しては批判的だったのか、このことは享受史をめぐる最初の話題になる。<sup>(21)</sup>と述べている。そこで慶政が『方丈記』をも享受していた可能性を推察する。

まずは『閑居友』という書名と「方丈の草の庵にて……」という自署に注目しよう。「方丈」も「閑居」も当時の書に普通に見える言葉ではない。しかしそれらはともに『方丈記』においては、その書名でありかつ「広サハワヅカニ方丈」「栖ハスナハチ浄名居士ノ跡ヲケガセリトイヘドモ」の方丈であり、「閑居ノ気味モ又同ジ、住マズシテ誰カサトラム」の閑居である。主題と密接した重要な言葉である。これらの言葉の、言葉としての強いインパクトを、慶政

は『方丈記』から受け止めていたのではないだろうか。自署は、

その時は、承久四年（よとせ）の春、弥生の中のころ、西山の峯の方丈の草の庵にて記しおはりぬる。  
とある。『方丈記』のそれと比較してみよう。『方丈記』の自署は広本にのみある。

于時、建暦ノフタトセ、ヤヨイノツコモリコロ、桑門ノ蓮胤、トヤマノイホリニシテコレヲシルス。

自署の型というものは多かれ少なかれこのようなものであろうが、『方丈記』は『池亭記』の「天元五載孟冬十月、家主保胤、自作自書」を踏まえたものと思われ、「家主保胤」と「桑門ノ蓮胤」が呼応する。しかし『閑居友』には名前こそないが『方丈記』と『池亭記』の関係以上に、仮名の自署として『方丈記』の表現との重なりが見られる。『閑居友』が「弥生の中のころ」であるのに対し、『方丈記』は「ヤヨイノツコモリコロ」である。弥生が一致したのは偶然かもしれないが、その月をさらに「中」と分けるのは『方丈記』の「ツコモリ」と同じ意識である。また『閑居友』は「西山の峯の方丈の草の庵」と記すが、『方丈記』が「トヤマノイホリ」と、草庵の場所を記したと符合する。『閑居友』がことさら「方丈の草の庵」とするのは、『方丈記』が自明なこととして自署に記さなかった、その長明の方丈の庵を意識したものではないかと思われる。

慶政は建保七年以降の往生伝書写の奥にも「西山峯方丈草庵」と記しているが、『閑居友』の起筆はこれに先立つ。「方丈」の語は仏者の間では「維摩の方丈」がすぐに想起されるもので、『方丈記』のような仮名書きの作品には珍しいと言う。「方丈」の語は慶政が書写に携わった『後拾遺往生伝』の巻下一八に「方丈室内」とあり、また『古事談』には二一四話に「有方丈之草庵」、三〇〇話に「方丈ノ庵室」とあり、ないわけではない。しかしこれらの用例はごく少なく、慶政が敢えて己の室を呼ぶ契機になりえたかどうか。

そうした用語のみならず、『閑居友』が『発心集』を意識した説話集であるにも関わらず、むしろ『方丈記』に近い強い自照性を示していることも注目される。<sup>(22)</sup>たとえばその跋文の自照性は『方丈記』の末尾を思わせる。

あさましや、まなこのまへのかげろふの、あるかなきかの世の中に、かりの名にふけりて、ながき夜をおくり、いつはりの色にほだされて、昔の五戒の報を行方なくなしはてん事、かなしくも侍かな。しかるを、無明のねぶりふかくして、この世をいみじとしもおもはねど、昨日もいたづらにすぎ、今日もむなしくくれぬるぞかし。……ねがはくは、釈迦如来、阿弥陀如来、すべては四方の仏たち、むかしの誓をかへりみてあはれみをくだし給へとも也。

『方丈記』の末尾は次のようである。

抑、一期ノ月影カタブキテ、余算ノ山ノ端ニ近シ。タチマチニ三途ノ闇ニ向ハントス。何ノワザヲカカコタムトスル。仏ノ教ヘ給フ趣キハ、事ニ触レテ執心ナカレトナリ。今、草庵ヲ愛スルモ、閑寂ニ着スルモサハリ（原文はサバカリ）ナルベシ。イカガ要ナキ楽シミヲ延ベテ、アタラ時ヲ過グサム。……只、カタハラニ舌根ヲヤトヒテ、不請阿弥陀仏両三遍申テ已ミヌ。

『方丈記』末尾の意図は研究者の争点ともなっているが、私見は自照性の強い自戒であり、かつそれに託して懺悔・発願を意図したものであらうと考えている。『閑居友』もおそらくそれと心得て、『方丈記』の影響のもとに自照的な懺悔・発願の跋文をものしたのではないかと推察する。

以上、『閑居友』は『方丈記』を念頭においていると思う。最も初期の熱心な享受であらう。その『方丈記』とは、末尾及び自署を有する広本に他ならない。

## (2) 『続歌仙落書』

成立は貞応元年（一二二二）から元仁元年（一二二四）の間と推定されている。作者不詳。新古今時代の歌人十五人の数首の歌を選び、歌評を添えたものである。その長明の歌評に、

風体、比興を先として、またあはれなるさまなり。潯陽江頭に、琵琶の曲に昔語りを聞く心地なむする。

とある。和歌の批評として白樂天の「琵琶行」が引き合いに出されるのは、少々意外であろう。長明に関する知識が脳裏をかすめたとするなら、それは長明が琵琶の名手であったという事実以上に、『方丈記』の次の一節によるであろう。

モシ桂ノ風葉ヲ鳴ラストベニハ、尋陽ノ江ヲ想ヒヤリテ源都督ノ行ヒヨナラフ。

琵琶を弾く長明の自画像に基づいた記述だとしてよいなら、それは無論、広本によるものである。

(3) 『十訓抄』巻九——〇

これは長明出家説話である。建長四年（一二五二）、長明没後わずか二十六年の成立。『方丈記』に関わる記述は次の部分である。

此人後には大はらに住けり。方丈記とて假名に書をける物をみれば、はじめのこと葉に、ゆく河の流れはたえずして、しかももとの水にはあらずと有こそ、世間人而為世人萌々行暮川関水而為川水滔々日度、といふ文集のをかけるよとおぼえて、いと哀也。しかれどもかのいほりにも、をり琴・つぎ琵琶などもなへりけり。念佛のひまひまに、絲竹のすさみを思すてざりけるこそ、すきのほどいとやさしけれ。

作者が『方丈記』を見たことは確かである。仮名であることと冒頭の言葉の部分からは略本の真字本は当てはまらないが、広・略いずれの本文をさすとは限定できない。しかし庵に「をり琴・つぎ琵琶」を伴い「念仏のひまひまに」との条件を付しているのは、広本の「念仏物ウク読経マメナラヌ時ハ」を踏まえているとみられるし、「絲竹」の語も広本に見える。略本の延徳本にも「折琴つぎ琵琶」を持ち込んだ記述があるが、それには「今更の身にはおふせぬ手すさびながらも、昔忘れぬ名残に折ふしはかきなで」とし、念仏との関係は記していない。この部分の記述は多く広本に拠った可能性がある。

(4) 『文机談』 菊亭本卷三

成立は文永九年（一二七二）以降。長明の琵琶についての逸話——いわゆる長明秘曲尽くし事件を載せる。長明没後五十六年余経るが、作者隆円は長明の同時代に生きた藤原孝道・孝時父子の西流琵琶を伝え、孝時を師としてその談話を多くこの書に載せる。長明の逸話も孝時あたりからの聞き書きと推察される。さて『方丈記』に関する記述は次の部分である。

ついに長明洛陽を辞して修行のみにちぞ思たちける。たまくしげふたみの浦といふ所に方丈の室をむすびてぞ、のこりすくなき春秋をばをくりむかへける。浄名の三万二千の徳もこれにやはすぎ侍べきとおぼえけり。件の記録はいまだ世のひととてあそぶ物なれば、定て御らんじたる人もをはしますらん。

「件の記録」は『方丈記』をさすであろう。内容に少し誤謬があり作者自身が実際に読んだかどうかは不明である。『方丈記』が当時の人々の間で人気を博していた実情を告げて貴重である。人々の口に上っていた『方丈記』を聞きかじった知識が、この文章の下敷きにされているのだろうか。

「浄名の三万二千の徳」という記述は、「方丈」ということから容易に想起されたとも思われるが、『方丈記』末尾の「栖ハスナハチ浄名居士ノ跡ヲケガセリトイヘドモ」の記述の影響を考へることもできる。略本『方丈記』が「浄名居士」に触れることがないことに思い致すなら、「方丈」が即「浄名」を想起するものでなくてもよいのである。やはり広本末尾の一文の印象が作用して、人々の口に伝えられたのではあるまいか。その時、有名な浄名の「三万二千の徳」という語を付されて、もって、長明賞賛の言葉に替えられた——。注目すべきは末尾の長明の浄名居士に比した自戒が、どうやら積極的な道心の現れと評価されたいらしい享受のありようである。

また「のこりすくなき春秋をばをくりむかへける」と記すことも注目される。『方丈記』が長明の晩年の所産であるとする理解は、長明を直接知る者からの伝えでなければ、『方丈記』から読者が理解したということになる。ところが

略本には長明の人生の経緯や年齢は一切記されていない。略本を読む者には『方丈記』が長明の晩年の所産であるということすら念頭に上らないであろう。しかるに広本は人生の曲折を経て方丈の庵を得たことが強調されており、「五十ノ春ヲ迎ヘテ、家ヲ出テ世ヲ背ケリ」や「ココニ、六十ノ露消エガタニ及ビテ、更、末葉ノヤドリヲ結ベル事アリ」と言つた記述から、読者は方丈における生活が長明の晩年であることを印象付けられる。

これらの記述は広本からきいて見えてよいと思う。「世のひとのもてあそぶ物」であつた『方丈記』は広本であつたということになる。

(5) 『本朝書籍目録』

成立は建治三年（一二七七）から永仁三年（一二九五）とされる。中世における現存作品の状況を知る上では貴重な目録である。その「假名」の部に、

方丈記、一卷、同（筆注・鴨長明）撰

とある。つまり『方丈記』が仮名であると伝える。この条件には略本の真字本以外の全ての諸本が該当する『方丈記』が仮名であることは、先に見た『十訓抄』の記すところでもあり、略本の真字本が存在していた（少なくとも世に享受された）形跡のないことを窺うことができる。<sup>(23)</sup>

(6) 『寝覚記』

弘安六年（一二八三）以降鎌倉末期の成立と見られている。作者を『本朝書籍目録外録』は一条兼良とするが、年代的に合わないとされる。『十訓抄』のような教訓説話集であるが、その序文に『方丈記』を踏まえた文言が多く目につく。「一期の月影かたぶけり」は言うまでもなく広本末尾の「一期ノ月影カタブキテ」であり、また、世俗生活の煩わしさを述べた段には広本『方丈記』のそれに該当する段が踏まえられている。

もしをのれが身かずならねば道理あれども、けんゐにおされてうばはれぬ。わうごむのをくりものなければ、又



かつ事をえず。とめる人がどんよくますますふかし。たまたまたからをついやすときは、心神苦痛してやすき事なし。まづしきものは、よろずに恥辱おほくして、人にかろしめられる。へつらはじとおもへどもへつらひ、いはじとおもへどもいかるころねんねんにうごきて、ときとしてやすき事なし。……すべてうき世をもてわづらふるたぐひ、あげてかぞふべからず。

一致する語句に傍線を施してみたが、そうした箇所<sup>(24)</sup>の指摘よりも、全体の叙述が極めて近い。世俗生活の煩わしさを述べた段は略本にもあり口調も広本と近似しているが、『寢覚記』の叙述は広本のものである。

この作品の主な出典の一つに『十訓抄』がある。その取り方は、村田秋男氏によると、「簡略化した傾向を有するものであり、前半は同文的であり異同は少ないが、後半はかなり異同が認められる。これは撰者による改竄がなされているようではあるが、内容的に甚だしい相違が存するものではなく<sup>(24)</sup>」という。この取り方は兼良の『東斎随筆』における取り方に似ていると思う。この作品が、一部に伝承されるように兼良の作品であるなら、兼良の原典の取り方、また『方丈記』の享受として興味深いのであるが、残念ながら否定的な見方がされている。<sup>(25)</sup>

(7) 『元徳二年三月日吉社並叡山行幸記』

元徳二年（一一三〇）の記である。ここに、

松坂松岡をこえ、五位墓四宮河原になりぬれば、鴨長明が述懐せし外山はるかにみえわたり、とある。長明が述懐した外山と言うのであるから、それは『方丈記』を読んで得た知識であるに違いない。「外山」の地名が見える『方丈記』は広本である。大福光寺本は本文中に「名ヲトハ山トイフ」とあり、自署に「外山ノ菴ニシテ」とある。他の広本は古本系も流布本系もすべて、本文中の方も「外山」となっている。

(8) 『拾藻鈔』

長明と和歌所の同僚であった歌人藤原秀能の曾孫である公順の歌集。建武元年（一一三三）以後の成立。

鴨長明とやまの方丈にかきつけ侍りし

くちはてぬその名ばかりとおもひしにあとさへのこる草のいほかな

とあり、公順は長明没後一二〇年余の後、方丈の庵跡を尋ねている。広本『方丈記』にのみ日野の草庵のことは記されている。当時の『方丈記』の知名度が知られる。

(9) 謡曲「養老」

世阿弥（一三六三ごろ生まれ、一四四三ごろ没とされる）の作。本文中に、

それ行く川の流れば絶えずして、しかも元の水にはあらず、流れに浮かむ泡沫は、かつ消えかつ結んで、久しく……

とある。これは『方丈記』の冒頭が名文かつ音楽性にすぐれたものとして享受されていたことも物語るであろう。ただしこの冒頭は広・略いずれにも異同がない。

(10) 『ひとりごと』

心敬が応仁二年（一四六八）に著した書である。応仁の大乱を経験した心敬は、「まのあたり世は餓鬼道となれり」との感慨から『方丈記』を想起して次のように記す。

むかし鴨長明方丈記といへる双帯に、安元年中に日照りて、都の内に二万余人ばかり死人侍り、大風に火さへ出て、樋口高倉の邊よりはじめて、中御門京極まで火とびありきて、都やけうせ侍るなどしるしをけるをこそ、浅ましくも偽とも思ひしに、たちまちにかゝる世をみる事、ひとへに壊劫末世の三災こゝに極まれり。

「思ひしに」との直接体験で述べられているので、心敬が以前『方丈記』を読んだことは確かであろう。関東に下った現在は手元に『方丈記』がないためであろうか、養和の飢饉、安元の大火の記事が混然とし、地名や人数に間違いがある。治承の辻風に出てくる「中御門京極」の地名がここに混入している。記憶違いはともかく、心敬が読んだ『方

丈記』は五つの災害の記述を含む広本であった。

(11) 『東斎随筆』二七話

作者一条兼良は応永九年（一四〇二）生、文明十三年（一四八一）没。兼良は先に述べたとおり『方丈記』兼良本の書写もしている。『東斎随筆』は『十訓抄』の長明説話を書承し一部切り捨てて簡略化しているが、『十訓抄』にない記述を加えている。

大原山ニ住ケリ。其後日野ノ外山ト云所ニ有テ、方丈記トテ仮名ニテ書タル物アリ。

『十訓抄』の記述は「此人後には大はらに住けり。方丈記とて假名に書をける物をみれば」であり、『方丈記』がどこで書かれたか明確でなく、大原で書かれたかとの誤解をされそうである。しかしこちらでは大原から日野に移り、日野で『方丈記』を書いたことを明確にしている。これは広本『方丈記』の内容と一致する。さらに『十訓抄』に「大はら」とあるをあえて「大原山」としたのは広本に「大原」ではなく「大原山」とあるのを意識したと考えられる。「日野ノ外山」も、広本の知識によって加えたのであろう。広本・古本のうち、大福光寺本のみは先に記したとおり、文中に「名ヲトハ山トイフ」とある、しかし古本も他はすべて「名を外山といふ」となっている。兼良が書写した兼良本を始め流布本も「名を外山といふ」とある。兼良本の祖本は文中の「外山」だったのであろう。兼良は広本『方丈記』に矛盾しないよう、『十訓抄』の言葉不足を補ったものと推察される。

(12) 『体源抄』十二ノ下

豊原統秋の著で、成立は永正九年（一五一一）。『十訓抄』の長明の説話がそのまま全文引用されている。その本文と異同はないのだが、彰考館本『十訓抄』に「菊大夫」とあるものがこの古典全集本では「南大夫」となっている。書陵部本『東斎随筆』は「南大夫」とあるが類従本『東斎随筆』には「菊大夫」とある。『後白河院北面歴名』（『水荃』六号に影印あり）の鴨長明の項には「南大夫」とある、「南大夫」が正しいかと思われるが、国史大系『吾妻鏡』建暦

元年十月十三日条には「菊大夫長明入道」とある。菊と南は字体が似ているので、それぞれ伝本の原字を再確認する必要があるそうである。

(13) 『平家物語』

『方丈記』の享受についてすでに多く論じられているのが『平家物語』である。『平家物語』は諸本が多く、各諸本の成立や諸本間の関係は困難を極める問題である。しかしながら『平家物語』のいずれの諸本も、『方丈記』の五大災厄を享受した痕跡が認められている。したがってその『方丈記』は五大災厄の記事を持つ広本であることは確かである。

『平家物語』諸本の『方丈記』享受の方法は、佐伯真一<sup>(26)</sup>氏の言う「『方丈記』の文章はそのまま丸ごと採り入れられるのではなく、独自の工夫を交えた文章の中に吸収される形で利用された」と見てよいであろう。同氏は、中で四部本の辻風と飢饉の部分は、「依拠した『方丈記』がどのような系統の本文であるかある程度までは推定させる程に、細部に至るまで全面的に『方丈記』に依拠している」と注目すべき指摘をし、その状態を調査している。よってここでは氏の調査を紹介して、その結論に耳を傾けようと思う。氏は四部本の辻風と飢饉の本文から14箇所を取り上げ、青木伶子氏の『広本略本方丈記総索引』による『方丈記』広本諸本の記述とを比較対照し、次のとき結論を得ている。

大福光寺本は『一致10対不一致4』で最も一致度が高い。一方、流布本は概ね『一致4対不一致10』で、四部本からは遠い。大福光寺本以外の古本系諸本は、大体『一致9対不一致5』ないし『一致6対不一致8』の間に属するが、前田家本・山田本・三条西家本・正親町家本といった、大福光寺本に次ぐ古本とされる諸本は、すべて『一致9対不一致5』と大福光寺本に次ぐ数値を示し、おおよそ、現在の『方丈記』研究で古本とされる伝本程、四部本との一致度が高いと言えそうである。

佐伯氏の検証からすると、四部本が依拠した『方丈記』は、古本系であり、大福光寺本に最も近いが大福光寺本にも誤脱があるらしく、その祖本というべき本文を想定できるというのである。

(14) 『西行物語』（正保刊本及び久保家本『西行物語絵巻』詞書）

『西行物語』の成立は早く鎌倉末期にはすでに存在したとされる。しかし諸本が多く、それぞれの成立時期は分明ではない。『方丈記』に関わる記事が存在するのは、久保家本『西行物語絵巻』の詞書および正保刊本に同文で載る武蔵野の僧の話である。西行が東国修行の折、武蔵野で一人の遁世者と遭遇し対談するこの話は、長明の『発心集』を初見とし『撰集抄』にも載る。『西行物語』の諸本では、これら二書の外にも、宮内庁書陵部蔵及び神宮文庫蔵の『西行物語』、『西行物語絵詞』、『西行一生涯草紙』などに載る。しかし本文の異同が多く、『方丈記』に関わる記述は先に挙げた二本のみである。

さてこの本文は『発心集』・『撰集抄』のいずれとも同文ではないが、いずれの記事とも重なる部分があり、どちらをも参照して改変・敷衍したものではないかと推測され、全体的には『発心集』が敷かれていると判断される。僧の庵は次のように描写される。本文は『西行全集』（ひたく書房）の『西行物語絵巻』詞書に拠る。

わづかなるいほりのうへをば、すすき・かるかやにてふき、萩・女郎花、色々の秋の草にてめぐりをかこひ、よるふす所と覚えて、東によりてわらびのほどろをおりしき、西の壁に絵像の普賢をかけ奉り、御前には法花八軸をかけたなり。

この部分は『発心集』には、

僅かに一間ばかりなる庵ありけり。萩・女郎花をかこひにして、薄・かるかや・萩などを取りまぜつつ、上には葺けり。

とあり、『撰集抄』には、

花を手折て家居せる僧あり。

とある。『西行物語』の庵の囲い及び屋根に関する描写は『発心集』に近い。ただし庵の内部を描写するのは『西行物語』のみである。しかもその描写はどうかやう『発心集』の作者長明の、もう一つの著『方丈記』による、長明本人の庵を意識したもののようである。この部分を『方丈記』と照合しよう。『方丈記』のこの部分は広本においても古本系と流布本系では異なり、略本は略本間では一致するが、広本とは異なる描写になっている。

○よるふす所と覚えて、東によりてわらびのほどもをおりしき、(西行物語)

・東ノキハニ蕨ノホトロヲ敷キテ、夜ノ床トス。(古本・大福光寺本)

・東にそへて蕨のほとろをしきつかなみをしきて夜のゆかとす。(流布本・兼良本)

・東南の隅五尺には蕨のほとろをしきて、夜の床とし、さゆる霜の夜に身を暖たむ。(略本・延徳本)  
この部分で『西行物語』に最も近いのは大福光寺本である。

○西の壁に絵像の普賢をかけ奉り、御前には法花八軸をかれたり」(西行物語)

・ソノ西ニ闕伽棚ヲツクリ、北ニ寄セテ障子ヲヘダテテ阿弥陀ノ絵像ヲ安置シ、ソバニ普賢ヲカキ、マヘニ法花経ヲ置ケリ。(古本・大福光寺本)

・にしのかきにそへて阿弥陀の画像をあんぢしたてまつりて、落日をうけて眉間の光とす。彼の帳のとびらに普賢並に不動の像をかけたなり。(流布本・兼良本)

・西北の隅五尺には竹の簀の子をしき、阿弥陀の絵像を安置せり。(略本・延徳本)

『西行物語』の普賢の像とその前に置いた法花経という記述を満たすのは古本のみである。

『西行物語』のこの部分に『方丈記』の影響を見ることが可能であり、その『方丈記』とは広本の、それも流布本でなくして、古本であろうと推定される。

以上、管見の及ぶところ、中世に享受された『方丈記』とは広本のみであり、それも『平家物語』や『西行物語』のように本文で比較できるものに徴すると、古本系統であつたようである。少なくとも、略本の本文、及び流布本にのみある部分が引かれている作品は見当たらない。

### おわりに

中世を通じて享受された『方丈記』、その姿は広本のみである。さらに言えば、古本系統の本であるらしい。広本の流布本系、及び略本（長享本・延徳本）は室町時代後期のほぼ同時期に出現したと見る事が可能である。臆測になるが、それは一条兼良の身边においてであるように思う。一つの仮説として、一人の人物によつて成つた、それは兼良のような人物において可能であつたと想定してみたい。『方丈記』諸本の成立の問題——ことに略本が後人偽作か長明真作かという問題——は、長明の『方丈記』という作品の質を問う意味でも、長明という作者の意識や質を問う意味でも、今後も様々な観点から検討が加えられなくてはならないであろう。甚だ臆測に満ちた論で忸怩たるものがあるが、一つの試みとした。

### 注

- \* 『方丈記』の本文の引用は新日本古典文学大系（底本は大福光寺本）による。
- (1) 岩波文庫『方丈記』解題、昭3
  - (2) 『鴨長明の新研究』中文館、昭13、『鴨長明研究』加藤中道館、昭55
  - (3) 「方丈記の基礎的研究」『中世国文学研究』磯部甲陽堂、昭18
  - (4) 日本古典文学大系『方丈記徒然草』解説、昭32
  - (5) 新註国文学叢書『方丈記』解説、昭23、講談社文庫『方丈記』解説、昭46
  - (6) 「方丈記の思想と文体」『日本文学』昭36・1、「方丈記論」『藤女子大学国文学雑誌』昭43・9。いずれも『隠遁の文学』

(笠間書房、昭50)に所収。

- (7) 「広本方丈記と略本方丈記」『国語と国文学』昭和39・12、「略本方丈記考」『国語と国文学』昭55・3
- (8) 「方丈記密勘I・III」『福島大学教育学部・論集』昭46・11、昭48・11、昭和49・11
- (9) 鑑賞日本古典文学『方丈記徒然草』総説、角川書店、昭50、「発心集」から『方丈記』へ『国語と国文学』昭53・5
- (10) 新日本古典文学大系『方丈記徒然草』解説、平1
- (11) 「略本方丈記考―その構成をてがかりとして―」『中世文学』平5・6
- (12) 前注(2)
- (13) 古典文庫『方丈記付十六夜日記』解説、昭31
- (14) 『西洞院時慶卿記』(文禄二年六月二十七日条)に「鴨長明方丈記借用候、兼良公ノ御自筆ナリ、則書写候」とあり、書写された事実が知られる。
- (15) 前注(3)
- (16) 永島福太郎『一条兼良』吉川弘文館(人物叢書)、昭34
- (17) 前注(13)
- (18) 武井和人『一条兼良の書誌的研究』(桜楓社、昭62)における第二章第一節。
- (19) 前注(13)
- (20) 前注(2)、(11)の見解を始め、そのような理解は多い。
- (21) 『シンポジウム日本文学6・中世の隠者文学』学生社、昭和51
- (22) 美濃部重克『閑居友』(三弥井書店、昭49)の解説に「閑居友」は『方丈記』などに顕著な隠遁者風の自己観照が印象的であり、随筆性の濃い内容をもっている」と指摘がある。
- (23) 真字本については武田孝氏は「真字本『方丈記』について」(『解釈』昭47・2)において「漢文としてはあまりにもひどい文章であることが確認される、……長明が身につけていたはずの教養を思い、かれ自身が書いたとみられる他の作品の表現をあわせて考える時、このような形の真字本が、仮に草稿本としてであっても、長明の手に成ったとは、信じがたい」と言い、また「真字本『方丈記』の作者は、他の和文の略本をもとにして、自己のもつ漢文の知識を総動員し、ただひたすらに、かなを改めて全文を漢字で表記しようという目的のもとに、それを書きあげたものと思われる。」と言う。
- (24) 古典文庫『寢覚記』解説、昭55
- (25) 前注(24)、および『日本古典文学大辞典』寢覚記の項(浅見和彦氏)
- (26) 『平家物語』の『方丈記』依拠『帝塚山学院大学研究論集』昭61・12